東京都千代田区神田駿河台 3-2-11
連合会館１階　原水禁気付
「さようなら原発 1000 万人アクション」
実行委員会
電話　03-5289-8224
ＦＡＸ 03-5289-8223
【郵便振替】
00100-8－663541　加入者名
「フォーラム平和・人権・環境」
『さようなら原発 1000 万人アクション』と通信欄に明記

さようなら原発
1000 万人ニュース

第２４号
2018年7月2日

事故から７年。いまこそフクシマとの連帯を！

３月 18 日、福島県楢葉町の天神岬スポーツ公園において「2018 原発のない福島を！県民大集会」が開催され、県内外から市民 3,300 人（主催者発表）が参加しました。

主催者を代表して挨拶した角田政志実行委員長は「原発事故によって奪われた暮らしと人権を実際に見てほしい」と 2015 年9月に避難指示が解除された楢葉町を集会会場とした意義について語り、「福島・被災地の（問題の）深刻化、山積する課題によって、県民はさまざまな意見のある中、さまざまな思いを持ち、さまざまな選択を強いられている」など原発事故によって生じた課題の複雑さを語りました。そして「事故を再び起こさせないため原発のない福島、世界をつくろう」と呼びかけました。

「さようなら原発 1000 万人アクション実行委員会」の鎌田慧さん（ルポライター）も連帯のあいさつに立ち、オリンピックに向けてフクシマを切り捨てようとする流れに抗していこうと訴えました。

県内の避難者からは、「（事故前は）大家族で暮らしていたのに、いまは3カ所に離れ離れに暮らさざるを得ず、この先また一緒に暮らすことはできない」「原発さえなければ、このようなことにならなかったのに」と事故によって故郷や家族の絆を失った悲しさを訴えました。そして「福島の事実を多くの人に広めてほしい」と参加者に向かって訴えました。

何回呆れ果てても

神田香織（講談師、賛同人）

自分の作品で恐縮ですが、講談「福島の祈り」は「この事件（原発事故）は3.11から始まったのではなくそれ以前から原因がありました。どこまで遡ればいいのだろうか、果てしない歴史へのまなざし」と言うセリフから始まります。ほんとうにどこまで? それは戦後か、戦前か、はたまた明治維新なのでしょうか。

3.11はそれまでの価値観をリセットするチャンスだったことは間違いありません。私たちはそのチャンスを逃してしまいました。原発を国策として推進していたあの体制は6年前に息を吹き返し、その2年後には原発をベースロード電源と位置付ける、とか言って再稼働に突き進んでいます。東電を解体しなかったがために血税は湯水のごとく投入され続け、やがては二度目の事故が!?

今、私たちはジタバタしながらもそのレールに乗せられている、ような気がします。毎日日替わりメニューのような事件やスキャンダルの報道に目を奪われて、消耗しています。いえ、消耗させられているような気がします。ほんとはそれどころじゃない、まだ緊急事態宣言が発令されたままの福島の現実こそもっともっと報道してもらわねば! と焦っている自分がいます。

私は福島原発事故の9年前から旧ソ連の原発事故を伝える「チェルノブイリの祈り」(2015年ノーベル文学賞受賞C・アレクシエーヴィチ著）を講談にして語ってきました。ですから国は当然チェルノブイリの教訓を生かし、被災者、被災地に対してすぐに善処してくれるものと信じていました。チェルノブイリでは汚染のひどいゾーンを区切って人々を移住させ、住居と仕事を斡旋していますから。ところが、福島市、郡山市、二本松市など部分的ではあってもホットスポットとなった場所から避難させなかったばかりか、7年経った今日では、避難区域外から県外に避難した方の住宅支援を打ち切り、帰還政策は実行され、モニタリングポストを外そうとする動きや汚染土を園芸用に使おうとする信じられない案も浮上する始末です。

被災地3県の自死者数は福島県が群を抜いていますし、子どもたちの甲状腺がんも増え続けていて、どれほどの人たちが物心両面で追いつめられているか…。「命」に格差がつけられてしまったのです。

初動を間違うとすべてがとことん悪くなります。将棋も初手を間違えると相手のミスがない限り勝ち目はなくなり、嘘もそうですね。ひとつ嘘をつくと辻褄を合わせるためまた嘘をつかないといけない、そのうち収拾がつかなくなり(笑)。

でも大丈夫、この体制の下では生きていけないと思ったら流れを変えればいいだけです。気づいた時が出発点、自分にできることを空気を吸うようにやり続けること、です。憲法で保障されている表現の自由、集会、デモ等に参加することもとても大切で正当な行為ですし、私は語り部という仕事を通じて世の理不尽を問うて参ります。

みなさん、何回呆れ果てても、あきらめないで、沖縄を見習い明るく楽しくしつこく続けようではありませんか！

最後に宣伝を。8月26日午前10時から講談「チェルノブイリの祈り」をなかの芸能小劇場で語ります。

問合せ：オフィス10　TEL03-6304-8545
office10.jyu@gmail.com

雪の舞う中、12000 人が参加
「3.21 さようなら原発全国集会」レポート

３月 21 日、雪の舞う東京・代々木公園で「『いのちを守れ くらしを守れ フクシマと共に』さようなら原発全国集会」（主催「さようなら原発一千万署名市民の会」）が開催されました。１万２千人が参加し、「被災者の切り捨ては許さない」「原発ゼロの実現を」「安倍政治を終わらせよう」などと訴えました。

呼びかけ人の落合恵子さん（作家）は主催者挨拶で「独裁としか呼べない安倍政治にこれ以上つきあえない。福島の苦しみと喪失から目をそらし、沖縄を苦しめ続け、人の命には鈍感で、どこを信頼しろと言うのか。安倍内閣を退陣に追い込もう」と呼びかけました。

福島第一原発事故と関連しては、まず「子ども脱被ばく裁判の会」共同代表の片岡輝美さんが発言。「子どもたちから安心して暮らすことを奪ってしまった大人の責任として、裁判を闘っている」と訴えました。

原発事故の収束作業の中で被曝し、現在闘争中のあらかぶさん（仮名）は「白血病、鬱病に苦しんでいる。このようなことが繰り返されないよう東電の責任を明らかにしたい」と裁判に懸ける思いを語りました。

郡山市から静岡県内に一家で自主避難している長谷川克己さんは「政府や行政の対応は理不尽の連続だ。この子たちを置き去りにしたまま、どんな発展をめざしているのか」と、被災者の切り捨てが進む実態を鋭く告発しました。

次に、東海第二原発（茨城県東海村）の再稼働問題について、元東海村村長の村上達也さんが報告。「最も初期の原発であり、30 年の稼働を想定し設計されたものだ。周辺には百万人もの人が住んでおり、事故が起きれば大変なことになる。絶対再稼動はさせない」と語気を強めました。

韓国から来日した「核再処理実験阻止 30 キロ連帯」実行委員長のイ・キョンジャさんは「韓国でも核のゴミがたまり続けている。これを処理出来ないなら、原発はやめるべきだ」と訴えました。

また労働組合の青年を中心に組織され新潟・福島・茨城・東京を回って脱原発とフクシマ連帯を訴えてきた「フクシマ連帯キャラバン」一行も登壇し、活動報告を行いました。

「脱原発法案」については二人の方が発言。「原発ゼロ自然エネルギー推進連盟」事務局長の河合弘之さん（弁護士）は「世界は自然エネルギーに向かっている。自然エネルギーは経済競争力を持ち、経済界も無視出来ない」「我々は絶対に勝つ」と力強く語りました。立憲民主党のエネルギー調査会会長である逢坂誠二さん（衆議院議員）は「野党４党で『原発ゼロ法案』をまとめ、国会に提出した。全国 20 カ所でタウンミーティングをした。原発ゼロを多くの国民と協力して実現しよう」と呼び掛けました。

「戦争させない・９条壊すな！総がかり行動実行委員会」からは、共同代表の福山真劫さん（平和フォーラム共同代表）が発言。「原発をはじめ、森友学園疑惑、沖縄基地建設、朝鮮半島の緊張など許せないことだらけだ。政治を私物化する安倍政権を退陣に追い込もう」と声を高めました。

閉会あいさつでは、呼びかけ人の鎌田慧さん（ルポライター）が登壇。「原発事故以来、８年目への出発だ。雪をも溶かす皆さんの熱気で原発ゼロへ進もう」と集会を締めくくりました。

さようなら原発 1000 万人アクションの再稼働反対国会前行動

「さようなら原発 1000 万人アクション実行委員会」は、原発が再稼働する度に現地の抗議行動に連帯して、衆議院議員会館前で昼休みの抗議行動を展開してきました。3 月 14 日には関西電力大飯原発 3 号機、3 月 23 日には玄海原発 3 号機、5 月 9 日には関西電力大飯原発 4 号機、5 月 15 日には玄海原発 4 号機の再稼働に反対する声をあげました。一部その模様をお伝えします。

■大飯原発 4 号機再稼働へ抗議（写真）

5 月 9 日、雨の降りしきる中、約 40 名の仲間が集まり大飯原発 4 号機の再稼働に反対して抗議集会を行いました。この日、現地でもゲート前で市民約 100 人が集まりましたが、それに連帯する行動として取り組まれたものです。再稼働を強行させている政府に対して「大飯原発 4 号機の再稼働反対！」「自然エネルギーへの転換を！」と声をあげました。またこの日、福島原発刑事訴訟裁判の公判のため東京地裁を訪れた佐藤義和・支援団長も集会にかけつけ、「福島原発事故の原因の究明もされず、収束もしていない中での原発再稼働は許せない。二度とフクシマを引き起こしてならない」と訴えました。

■玄海原発 4 号機再稼働への抗議

九州電力は 6 月 16 日に玄海原発 4 号機を再稼働させました。2011 年 12 月に定期検査で停止して以来約 6 年半ぶりの再稼働強行となりました。

抗議行動は、16 日が土曜日のため前日の 15 日に国会前で行われ、この日も雨でしたが約 50 名が集まりました。主催者は「原子力政策がすでに破綻しているにもかかわらず、原発再稼働を進めることは、核のゴミなど負の遺産をさらに残すことになる」と発言。そしてこの日も武藤類子・福島原発告訴団団長が集会にかけつけ「東京電力福島第二原発の廃炉が決まり、これでやっと県内全ての原発が廃炉となります。これは県民が長い間願っていたことでした。今後玄海原発をはじめ各地の原発再稼働にも反対していきます」と連帯の挨拶をしました。また、浪江町から福島市内に避難している被災者も発言。「自宅があまりにも放射線の数値が高く、これでも『帰還』しろというのか」と事故から 7 年半たっても変わらない厳しい状況について語りました。

行動の最後には「玄海原発 4 号機の再稼働反対！」「原発再稼働をやめろ！」と国会へ向かってのコールを行いました。

■原発再稼働は問題だらけ

福島第一原発の事故が示すように、一度大事故が起これば、地元はもとより非常に広範囲に渡って多大な被害を及ぼすことは明らかです。原発が集中する地域では、地震や津波などによって同時にまたは連鎖的に事故が重なることも予想されます。一つの原発だけが事故を起こすとはかぎりません。さらに原子力規制委員会によって新基準に適合したからといっても「安全」だとのお墨付きを与えてはいないと、前の原子力規制委員長は繰り返し表明していました。そのほかにも避難・防災対策の問題、住民合意の問題、核のゴミの問題（特にプルサーマル発電によるＭＯＸ燃料の処理・処分の問題）など問題は山積しています。

「さようなら原発 1000 万人アクション」は引き続き各地で進められる再稼働に反対して、現地と連帯しながら、政治の場である国会前で抗議を続けていきます。

安全に暮らす権利を取り戻すために

「モニタリングポストの継続配置を求める市民の会」共同代表　千葉由美

原子力規制委員会は 2018 年 3 月 20 日、福島第一原発事故後 7 年が経過したことから、福島県内のモニタリング結果を整理、福島県及び県内市町村への意見照会を経て、学校や保育園、公園など子ども達の生活空間にあるモニタリングポスト（リアルタイム線量測定システム）の配置の見直しを行う方針を決定しました。2017 年 12 月、原子力規制委員会が県内市町村への意見照会を行った結果、各自治体からは継続配置を求める意見が提出されているのにも関わらず、原子力規制委員会はその意見を無視する形で避難指示区域、避難指示解除区域以外の地域からモニタリングポストを撤去することを決定しました。

このような強引な決定を受けて、私たちは「モニタリングポストの継続配置を求める市民の会」を立ち上げ、規制委員会に事故の収束作業という危険な状況下で暮らす住民の実情を伝えました。「大きな地震が来るたびに家族の安否を確認し、当時のあの場面が蘇る日々は今も続いている」という切実さは、経験しなければわからないことです。対応してくださった規制庁の課長も私たちの声を無視し、事故は収束したかのような発言を繰り返しています。

私たちは、国に対する訴えと共に各自治体の首長に「国に継続を求めてほしい」とお願いしながら、「地域の大切な子どもたちの安全を守る」という立ち位置を確認し、地方自治の在り方を問いかけてきました。これまで 7 つの自治体で要請書の提出を行いましたが、ほとんどの自治体で先頭に立ったのは、「モニタリングポストが撤去されてしまったら困る」という切実な思いを抱えた母親たちでした。生まれて初めての経験に、プレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、それぞれが真っ直ぐに母親の思いを伝えました。こういった一連の取り組みはメディアにも大きく取り上げられ、各自治体の多くの首長たちは「関係自治体や県と共に連携を取り、国へは継続を求めていきたい」という発言をし、「国の方針に従う」としていた自治体が継続を求める姿勢に転じるケースもありました。

未曽有の大事態に陥っているにも関わらず、その現実に向き合おうとはしない国の姿勢。しかし私たちの主張を妨げているのは、体制側の姿勢ばかりではありません。継続を求める一方で撤去を求めている自治体もあるとのことで、「モニタリングポストの存在は風評被害につながる。復興の妨げになる」というその声は、原発事故がもたらす問題の複雑さ、苦しさを象徴しているのだとも思います。また、事態の把握すらも困難な、市民の無関心な姿勢なども、なかなか声が高まらない要因のひとつです。このように、同じところに立っていながらも揃えることができない足並みをどのように合わせていくかということも、私たちが乗り越えなければならない難関であり、それについてはそれぞれが各自治体の中で地道で丁寧なはたらきかけをしていく必要があると思っています。

目の前にある問題を丁寧に伝えながら共感を生み出し、方向性を統一していくという、もう一度振り出しに戻るような取り組みを、事故から 7 年が経った今、この疲弊しきった中で行うのは容易なことではありませんが、有無を言わせぬ巨大な圧力に抗うためには、大事なものを守り抜くという強い軸が必要です。だからこそ、これは私たちにとっての大きなチャンスでもあり、強い軸を立てるための大事な取り組みだと思っています。

最後になりましたが、ここで私たちの取り組みにご協力くださっているみなさんに、感謝を伝えさせていただきたいと思います。先の長い取り組みになるかと思いますが、引き続きのご協力を、お願いいたします。今後の動きにつきましては、会のサイトでお知らせしますので、引き続きご注目ください。

HP　https://monitoringpost.blogspot.jp/
Facebook ページ　https://goo.gl/av1Tte

東海第二原発の再稼働は許してはならない

脱原発とうかい塾　相沢一正

福島第一原発事故を経験しての結論は、端的に「原発はもう廃止しかない」ということだが、その理由は次の三点だ。第一に、原子炉内に溜まる大量の放射性物質（「死の灰」等）は無毒化・無害化はできない。第二に放射性物質を原子炉内に閉じこめて、環境に出さないような決定的な技術はない、すなわち過酷事故は起こる。第三に、原子炉が稼働する限り放射性物質は溜まり続け、子々孫々に危険と費用が付け送りされる、ということである。

この三点のうち第二、第三は第一が克服されればおのずと解決されるから、根源的な問題は第一である。これについて一つのエピソードがある。日本における原子力開発の黎明期、その旗を振る当時の日本原子力産業会議の重鎮、橋本清之助は原子力の「平和利用」は「死の灰」を消滅できなければ文明として成立しないと考え、東大教授佐藤健二郎を長とする「放射能消滅の委員会」を組織した。委員会は①半減期を段階的に短縮することで放射能を消滅させることは可能である、②それに要する研究と工場の建設には通常の観念を超える資金を必要とする、との結論を出し、橋本は「それぐらいのことなら国際的な協力で」できると考え、以来主張し続けたという（橋本著『現代文明縁起　二十一世紀への提言』(1982 年刊行、81 年死去)）。しかしこの技術は 21 世紀の今日になっても実現していない。実現の見通しのない技術の上にたつ原子力の「平和利用」は虚構に他ならない。原発は存在してはいけないのである。

にもかかわらず、福島第一原発事故以後の、原発のない社会へ向けての大きな機会に背を向けて日本は原発の再稼働に歩を進めている。2018 年６月のいま、首都圏に最も近い東海第二原発の新規制基準適合審査などの手続きは大詰めに来ている。東海第二原発を所有する日本原電が再稼働に必要な安全対策費を自前で調達できないなど経理的基礎のないことが浮かび上がり、審査に必要な書類が準備できないなどの問題も指摘されていたが、それもこれも「言うだけは言う」という原子力規制委員会のパフォーマンスに落ち着いたようで、工事計画認可にかかる説明を８月末までに行うとの日本原電側の言質を得て、期限の 11 月 27 日までにはすべての許認可を通す心ずもりのようだ。

再稼働を目指している原発の中で東海第二原発は 1970 年代運転開始の、唯一のＢＷＲ型原発であり、前時代の設計思想や材料で建設されており、間もなく寿命とされる運転歴 40 年になり老朽化も進んでいる。3.11 には津波による浸水で原子炉の冷却能力が半減し、冷温停止まで通常より３倍長い３日半がかかったという被災原発でもある。原子炉の置かれている建屋の位置は次のような大きな弱点を抱えている。第一に、太平洋沿岸の平坦な砂浜の中で海抜８メートルの位置に建てられており、津波によるリスクが最も高い原発として規制委にマークされている。第二に、近接して東海再処理工場がある。その内部には使用済燃料の大部分を占める「死の灰」の溶液が溜まっている。海岸線の地続きで海抜７メートル。防潮堤も造成しない再処理工場に東海第二原発が想定する 17.1ｍの基準津波が襲ったらどうなるか。この発熱体の冷却が出来なくなり、発生する水素の掃気のために必要な電力が失われれば爆発・水素爆発が起こり「死の灰」が噴出して東海第二原発の安全も脅かされる。第三に、ことが起これば周辺の人口密度は最も高く、被ばくなしの避難も、避難先での長期滞在も不可能で、首都壊滅に至る。実効性ある避難計画は原発廃止だというのが多くの人の考えだ。こんな危ない原発の再稼働は地元と首都圏の住民で阻止するしかない。

「2018 フクシマ連帯キャラバン」報告

2014 年からスタートした「フクシマ連帯キャラバン」。青年労働者が中心となり、福島第一原発事故の被災者との連帯や脱原発社会の実現を訴えて行動します。今年で 5 回目となる「フクシマ連帯キャラバン」の参加者の声をお届けします。

現場と向き合うことから始めよう

今回の連帯キャラバンを通じて一人の個人として原発問題にいかに関わるべきなのか、その位置付けを定めることができた。キャラバンに参加する前から私は一応脱原発の立場であったのだが、そのことを語るとき何故か自信を持って語ることができなかった。それは単に勉強不足というだけではなく、経験の不足からくるものだったように思う。キャラバンは普段接点のない他業界の労働者や現地の人々との交流、また新潟や福島でのフィールドワークを通じて、私を一歩前進させてくれる貴重な経験を与えてくれた。

新潟では原発の構造の詳細や東電側の再稼働のための狡猾なレトリック、そして巻原発の誘致反対運動における地元住民の長い闘争の歴史などを学ぶことができた。新潟での経験も私に深い知見を与えてくれた。ただ、決定的な思考の足場を作ったのは福島での経験だった。

川俣町から県民集会が行われる楢葉町の天神岬に向かうため 114 号線を通った。114 号線は途中帰宅困難区域になっており、道路沿いの家屋の入り口には柵が立てられている。私たちはそこから高速道路に乗ったが、フレコンパックが道路脇に高く積み重ねられ 100 メートル以上続いていた。車窓からも黒と緑の物体が一区画分置かれている場所を至るところに確認できた。

集会での避難を強いられた方の発言が今も思い出される。「いつも家族行事で賑わい、欠けがえのない場所だった我が家が原発事故により一瞬にして住めない場所になってしまった。数年ぶりに見に行った時、天井は雨漏りによって抜け落ち、畳は腐って黒くなり、猪などが入り込んでいるために鼻が曲がるような臭いがした。しかし居間を見ればそこでの思い出が甦ってくる。どんなに朽ちていこうともそこは私たち家族の居場所だった」。原発は人との繋がりや思い出、喜びの中心にあった生活の場を破壊した。また飯舘村で廃屋と化した牛舎を訪れた際、原発により生業を奪われた酪農家が自殺させられた話がキャラバン隊の仲間からあった。仕事を理不尽に奪われた彼らは生きる意味すら失ったと思わされてしまったのではないだろうか。

浪江町の請戸港の光景を見たとき、原発が人間に何をもたらしたのかわかった気がした。津波によって破壊された町は未だにその状態で、窓ガラスがなく壁が割れて傾いた家が所々にあるだけで、あとは一面荒野が広がっていた。そこだけ時間が止まっているようだった。自然災害は人間の生活を理不尽に破壊するが、そこからまた生活を再建し文化を紡いでいくことまで禁じはしないだろう。しかし放射能は半減期という天文学的数値をもってその土地で人間が再び生活を営むことを不可能にし、その土地固有の歴史と未来の可能性を奪った。

そうした被害があるにもかかわらず加害者である政府や東電は避難補助金や賠償を打ちきり、もう安全であるという神話をばらまき、かつての住民を強制帰還させようとしている。飯舘村ではモニタリングポストの周辺だけ除染し数値を低く見せるという許しがたい詐欺行為も行われていた。こうした動きにしっかり抗っていくためにも、現場をしっかり見ることの重要性を強く感じた。

川口知由（全国一般労働組合東京南部）

お手紙紹介
「さようなら原発 1000 万署名」に込めた思い

毎日事務所に届けられる署名用紙。その中には、事務局スタッフ宛に書かれた手紙が添えられているものも少なくありません。

文面につづられたメッセージは、ときには被災者の直面する厳しい現状を突き付け、ときには脱原発社会の実現のために地道な活動を続けておられる人々の温かい心を届けてくれます。

ここではそのお手紙の中からいくつかをご紹介させていただきます。

黄色の地の「さようなら原発 1000 万署名」のポスターを送っていただいてから数か月になります。週に一度、画板の前に垂らして署名活動を続けております。20 名の方に署名をいただいたので送ります。

先日、20～30 代の男性が署名をしているわたしに近づいてきてくれました。そして名前を書きながら「わたしは福島の出身です」と話してくださいました。「いまどんな様子ですか？ 」と伺いますと、除染されたものがまだ敷地（とおっしゃったように思います）に置いてあります、回収されていません、とのことでした。さらに「がんばってください」と。わたしは、どうぞお気をつけて、としか声をかけられませんでした。本当に何も知らないで生活をしているのだなと感じます。

昨日、3.21 全国集会の案内を送っていただきました。賛同金を送ります。気持ちだけです。

どうぞお元気で。

（神奈川県、男性）

前略、ご免下さいませ。

2011 年３月 11 日の東日本大震災のとき、事故のあった福島第一原発から半径６～7 キロ離れた富岡町に住んでいたものです。

帰還困難区域に指定されていますが、それも３月 31 日までで解除されます。

また、国と東京電力を相手取って横浜地方裁判所で裁判になっています。その原告の一人でもあります。東京電力の事故で我々は避難を余儀なくされ、苦しい立場にあるわけですから、原告として国と東電にしっかり償ってもらいたいと思います。私たちのためによろしくお願いいたします。

（神奈川県、女性）